

# SRID NEWSLETTER

No. 314 JANUARY 2002 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

1月号 内容 南仏からイタリアへ

日本福祉大学経済学部教授、(株)ピー・ピー・エス 今井 正幸  
インターンシップ立ち上げ顛末記  
専修大学経済学部教授 田中隆之

## お知らせ

3. 新入会員 野本 啓介さん 国際開発銀行 開発金融研究所

会員異動 羽馬 友子さん  
株式会社 東洋紡パッケージング・プラン・サービス 情報調査部

佐藤雄一さん  
林野庁林政部 〒100 東京都千代田区霞ヶ関 1-2-1

2. 懇談会 2002年1月21日(月) JBIC 開発金融研究所にて  
講師 日本赤十字九州看護大学 喜多悦子 教授

3. 幹事会 2002年2月12日 JBICにて

4. 第2回シンポジウム 2月23日(土) 一橋大学学術総合センターにて

ヨーロッパ旅日記（2）

## 南仏からイタリアへ

日本福祉大学経済学部教授、(株)ピー・ピー・エス 今井正幸

2000年のクリスマス・イブは小雨模様だった。瀟洒な南仏の都市ニースは街中の店もひっそりと閉め切られ、人々の声も聴こえない。僅かに開いていたホテルの豪華なディナーに加わって、一人楽しい回想に耽っていた。

1971年のクリスマス休暇を、私はニースより少し内陸部にあるバカンス村でフランス人や34カ国からの留学生300人位と一緒に過ごしていた。2週間ほど昼はバスで近郊を訪れ、夜はワインを互いにご馳走し合ってわいわい騒いだ。正にこれぞバカンス！

おお、何という幸せ。離日の頃の憂鬱は雲散霧消して、誰彼となくこやかに話しかけた。「マミー」と呼ばれ、私は村人や仲間のアイドルとなってしまった。岩陰によって海中に小石を投げ入れ「たった3カ月のフランス生活が私の人生を一変させた」と語りかける。「本当？」と応えるガイド兼アニメーターの素敵なクリスチーナ嬢。唄って踊って陽気なブラジリアン、コロンビアン。ちょっぴり悪党ぶってるレバノン男。異文化との交流などという大義名分は全くいらなかった。

そして、クリスマス・イブの余興大会。あの会場を埋めた「マミー」への呼び声と歓声が、この一人ディナーのテーブルに甦る。今あの夜の興奮を記憶してくれているのは日本人グループに居た仏文学のK夫妻しか居ないだろう。

翌日コルシカ島へ。昔、機会を逃したこの小島でナポレオン・ボナパルトの生家を訪れた。あの時代の限りなく人間臭いドラマが絵巻物のように彷彿とする。さすがに街にはボナパルトの名称が至るところに氾濫している。まあ一目瞭然なのはフランス領ではなく、コルシカ人のイタリア領だということだろうか。島の中央、岬々たる山の中を横断したが、この中世の島は夏に訪れるのが最高だろう。北端のアジャクシオンからジェノバ経由でナポリに廻る。

ナポリ行きの車中で突如若い女性に日本語で話しかけられてちょっと驚いた。これが縁で、昨秋客員講師として私の大学で熱っぽく人権の尊厳について語ってくれた南山大学のアンジェラさんである。日本に恋をしたヨーロッパ人の一人なのだが、車中で数時間話しているうちにその国際感覚の豊かさと熱気に驚嘆させられた。

喧騒と混雑の街ナポリ、「これも一つの文化ですよ」と言ったアンジェラさんの言葉を噛み締めてみた。そして、訪れた博物館、美術館には鑑賞も記憶もできないほど、古代から近世に至るまでの美術工芸品の山があった。イタリアの魅力の一つは文化的遺産に濃く深く人間の匂いが感じられることだろうか。

ナポリからパレルモに夜遅いフライトで着く。シシリー島の首都として相当に大きな都市である。城跡、寺院、オペラハウス、そして公園にも、この街にやって来た様々な民族

の繁栄した時代が刻み込まれている。

大晦日の夜には、偶然街角で知り合った日本人旅行客と一緒にサルビナ・テルソ嬢のお宅に招かれた。彼女とその友人は20歳、彼女等の母親達と一緒に唄って踊って、愉快愉快。サルビナが時々通訳してくれる他は会話なんか通じはしない。でも装飾は手作りという小さなダイニング・ルームは楽しさいっぱいの笑顔であふれていた。もう一人若者が加わって、ミレニウムを祝うお祭りに出かけた。港近くの大広場は数万の群衆にあふれ、花火、爆竹、シャンペンを抜く音、音楽と大型スクリーン、熱気が古いも若きも包み込んで、みんな跳んだり跳ねたりしている。「今ごろ日本の大晦日はどんなかな」そんな思いもふと頭をかすめたが、またこの広場のざわめきの渦に飲み込まれていった。

パレルモから列車でイタリアの南端を廻ってバーリへ。長靴の踵に位置する小都市の群れはみんな小綺麗で落ち着いた佇いの街並みをしていた。古来、アドリア海・地中海の交易で栄えた町々の文化遺跡には異文化との交流が色濃く残っていた。ここは夏が最良のシーズンだろう。さらにアドリア海沿岸を北上してボローニャを訪れた。古都ボローニャは観光地としてあまりにも有名である。

アンジェラさんに「イタリアは好きだから、これで11回訪れたことになる」と洩らしたように、初めてのローマへの旅以来30年、時には漂泊の旅人のように多くの街をみて廻ったが、次のチャンスはあるだろうか。

## インターンシップ立ち上げ顛末記

専修大学経済学部教 田中隆之

国有化直後の日本長期信用銀行を退職し、大学教員に転じてから3年近くが経とうとしている。私にとってそれまで未知の世界であった大学「業界」も、金融業界同様、供給過剰という構造問題を抱えている。そのため、各大学では生き残りをかけて、様々な新しい試みが行われている。

専修大学経済学部では、今年度(2001年度)から「学外特別研修」(インターンシップ)という科目を新設した。夏休みに学生を企業、役所、NPO等に2週間ほど研修に行かせ、帰ってきてからレポートの作成、プレゼンテーションなどを行うことで単位を認定する、というものだ。その立ち上げを、私を含む6名の教員で行った。準備は一昨年からはじめ、研修生受入先の開拓、交渉、「覚え書き」の取り交わし、などすべてが教員の仕事である。初年度は、カリキュラムの都合上、履修が二年生に限られたこともあり、履修者は20名程度と少数だったが、私は、担当した5名の学生を某大企業の人事厚生子会社(A社)、編集プロダクション、社会開発コンサルティング会社の3社に送り込んだ。

以下、その過程で考えたことなどを記してみよう。まず、履修した学生への教育効果は、

それなりに大きかったと思われる。一例は、私が担当したB君のケースだ。同君は、前期（夏休み前）に行った事前授業に毎回遅刻して来るつわもの。教室内で帽子をかぶっているのを注意され、口を尖らせてしぶしぶ脱ぐという学生だった。研修先に迷惑をかけるのではないかと大いに心配したが、ふたを開けてみると研修期間の2週間無遅刻無欠勤で、研修先担当者から大変いい評価を受けた。狐につままれた気持ちだったが、休み明けの授業に出てきたときに、それまでと違って、こちらを直視するようになっていたのをみて納得がいった。

また、多くの学生が、提出したレポートに、「学生である自分と社会人との違いとして、礼儀、積極性、経験・知識の差を感じた」、「実社会の仕事は、受験勉強のような丸暗記では通用しない」などと書いてきた。

一方、企業の対応で驚いたのは、民間企業では当初なかなか受け入れてくれる主体が見つからなかったにもかかわらず、受け入れてくれた企業では、非常に熱心に学生のことを考えて対応してくれた点だ。私が担当した3社も、当初は「2週間、アルバイト料無料でこき使ってください」といったお願いに対し、「それだと最低3~4週間は来てもらわないと…」などと言っていた。そこを何とか2週間で話をつけて押し込んだところ、各社とも、それぞれに大変な教育的配慮をしてくれた。

一昨年からの準備過程で、次のような展開も記憶に残る。A社（の親企業である大企業）の人事部と学生受け入れの交渉を始めた段階では、基本的に受け入れは「難しい」という対応だった。ところが、昨年4月にその人事部と厚生部が子会社化されることになり、急速に話がまとまった。先方としては、もともと学生アルバイトをそれなりに使っていただけに、そこに2週間「ただ働き」の学生を入れることに、むしろメリットを感じていたのだが、「覚え書き」を取り交わす場合の決裁に関する社内手続きの面倒さが障害だった。それが、子会社化でクリアされた。分社化の一つのメリットは、こうした意思決定の迅速性としても表れるのだ。同社の担当者のお話では、パソコンへのデータ入力など単純作業を研修生たちにメインの仕事として与え、「それなりに元をとらせてもらった」とのことだ。それにしても、午前中は毎日人事制度についてのレクチャーをしてくれたり、夜は入れ替わり立ち代わり他セクションの社員を交え、飲み連れて行ってくれたようだ。

こうした学外研修を授業に取り入れる動きは、文部省が奨励していることもあり、各大学で盛んになっている。一方で、インターンシップは、周知のように、このところ企業側の動きとしても活発化している。松下電器などがその代表格として挙げられるが、外資系の金融機関などにも多い。この場合は、企業が独自に学生を募集するが、企業側の目的は究極のところ「青田買い」（リクルート）だ。これに対し、大学側の意図は飽くまで学生の「社会体験」であり、その点両者の思惑は一見すれ違っているように見える。だが、学

生にとっては、いくつかの企業を研修生として訪れてみて、就職に際しての自分の適性を判断することができれば、それはそれで望ましい。「社会体験」は、必然的に「就職先に際しての適性判断」につながっていく。

いずれにしても、企業独自のインターンシップが本当の意味で日本企業に根付けば、教員が研修先をお膳立てする必要もなくなるだろう。学生が自ら企業主導のインターンシップに応募し、帰ってきて授業で報告をして、それに大学が単位を与えるというやり方も可能になる。だが、今しばらくは、大学主導のインターンシップが必要な状況なのだろう。